

小泉八雲草稿・未刊行書簡拾遺集

第3卷 ノート類

八雲会編集

錢本健二解説

Gleanings of the Writings of Lafcadio Hearn

Vol. III. Notes

ed. by

The Hearn Society

江苏工业学院图书馆
藏书章

1992

雄松堂出版

略 歴

ぜにもとけん じ
銭本健二

昭和 18 年 3 月：島根県益田市生まれ

昭和 42 年：広島大学大学院文学研究科修了

島根大学教授，八雲会会長

著・編書：「ラフカディオ・ハーン年譜」（共著）

Appendices to the Writings of Lafcadio Hearn

「小泉八雲コレクション国際総合目録」等

小泉八雲草稿・未刊行書簡拾遺集

第 3 卷 草 稿

1992 年 10 月 30 日初版発行© 定価 12,360 円
(本体 12,000 円)

編 集 八雲会（代表：銭本健二）

解 説 銭本健二

発行者 新田満夫

発行所 株式会社 雄松堂出版

〒160 東京都新宿区三栄町 29

電話 03(3943)5791 振替 東京 5-162704

ISBN4-8419-0124-8 印刷：平文社 製本：博勝堂

序

本巻は、松江にある小泉八雲記念館が所蔵する3点のメモ帳や取材ノートを集め、それぞれに簡単な解説を付することにする。

ハーンが残したこうしたノート類については、今までも何人かの研究者がその内容を伝えている。古くは1931年(昭和6年)に大谷正信(繞石)が、3回にわたって「ヘルン先生の手帳」と題して、『英語青年』にかいつまんで紹介している。第一回目は本書に収められている東京帝国大学での講義メモ帳について、第二、第三回目は同じく本書に収められている関西・隠岐旅行の前半に関する取材ノートについてである。後者については、後に梶谷泰之氏が、『西田千太郎日記』(島根郷土資料刊行会、昭和51年)の記述と関連づけながら、「Lafcadio Hearnの紀行文、“From Hōki to Oki”——ノートから完成までの展開」(『島根大学論集』第10号、1960年)の中で、丁寧に復刻解説をしている。そして前者の東京帝国大学での講義メモについては、染村絢子氏が、「東大講義」(『へるん』第26号、1989年)において、出版された講義録や講義時期との対応を一覧表に示して、追跡調査の結果を報告している。染村氏は同じ『へるん』第26号で、本書に収められているクリオール民謡を採集したノートについても、「クリオール・フレンチ雑記帳」として、発表された作品との部分的な照合を行っている。

ここに収められた以外の取材ノートや講義メモに関しては、富田仁氏が、早稲田大学が所蔵する仏領西インド諸島の取材ノートについて、「仏領西インド諸島のメモ帳」を『明治村通信——小泉八雲展記念号』(昭和49年)に発表し、その内容を項目毎に概観している。また天理大学が所蔵する英文学史の講義メモについては、雄松堂出版から『小泉八雲の書簡と草稿』全5巻が1974年に刊行され、その1巻としてファクシミリ版で公表された際、河原畑正行氏の詳細な解説が付されている。その他のノート類について触れたものは、東北英語英文学会が出している『英米文学』第3集(1955)の雑録欄に「小泉八雲の肉筆草稿」という報告がある。N.Y.(編集同人の中島良夫氏であろうか)が小泉八雲の外孫に当られるA.I.(稲垣明男氏)の好意で、八雲の自筆草稿を見せてもらった時のことである。

わたくしが特に興味をひかれたのは、中判の茶褐色表紙の二冊のノート（ニューヨーク市 John Polhemus 文房具店のマークがついている）に黒インクでぎっしり書き込まれている草稿である。各表紙には黄色の紙をはって Contes [No.I]、Contes [No.II] と書いてある。そしてその中には八雲の創作らしいいくつかの短篇がかなり走り書きと思われる筆致で書かれている。これらのノートの草稿が書かれた年代はその一つ“カイエンヌに住むマルティニック人の手紙 (Letter d'un Martiniquais habitant Cayenne)”と題するクリオール語が書かれている詩の終りに 87 年 7 月 20 日と記されているのから推定して、八雲がニューヨークの出版社 Harper Brothers の通信員となって西印度諸島の仏領マルティニック島へ行った 1887 年からその島に滞在していた二年間と思われる。そして 1890 年（明治 23 年）4 月には日本へ来たことは周知の通りである。

面白いのは短篇の物語を構成する素材やモチーフを最初に項目として挙げているが、それが英語とフランス語とクリオール語をごっちゃに用いていることである。そして本文はすべてクリオール語で書いている。

西印度諸島滞在中の所産である *Two Years in the French West Indies* (1890) や *Youma, a Novel of Martinique* (1890) や *Creole Sketches* (1904) が手元がないので、それらに収録されている作品とこのノート原稿との比較ができないのは残念であるが、仔細に検討すれば、このクリオール語で書かれたコントの中には未発表のものがあるのではないかと云ふ気持ちがする。特に黒インキで書きなぐった後で八雲自身意に満たなくて鉛筆で各頁に縦に二三行あるいは一頁の三分の一とか数行消してある部分が目につく。“マルティニックの一日”という題名で書こうとしたらしいコントの覚書風の断片には“室とマルティニック蚊の細部”として“十字架”、“飾り棚”、“窓”、“寝台”、“暁方”、“コーヒー”、“百足”、“クモ”、“ブヨ”、“短靴”、“サメ”などの項目が列挙されている。登場人物らしいロロットとジョーゼフと云ふ二つの固有名詞の後には“朝食時”、“朝食後”、“雨傘”、“夕食”などの見出し語に続いて細部のアクションらしいメモが書き留められている。これはそのまま書き上げずに終わったものか、別に何かの素材として生かされたのか、このノート原稿だけでは判然としない。

このような取材ノートは、作品が完成するまでのいくつかの原稿の段階より前に存

在し、体験や読んだ素材の生の記述を保存するだけではなく、構想を立てる時の枠組を明らかにしてくれるなど、作家の創作の秘密をかいま見せてくれる。ここでは遺族をはじめ、故人の所蔵になるものを除いて、国内外の図書館に収められているノート類をできるだけ推測可能な年代順に列挙して、簡単な説明を付けることにする。

1. クリオールの歌取材ノート。

44 頁。23.6×15.5 cm。小泉八雲記念館所蔵。ニューオリンズ時代初期。本巻収録。

2. マルティニーク取材ノート。2 冊。

78 頁、72 頁。ハンティントン図書館所蔵。

1887 年 7 月上旬にニューヨークのイースト・リバー 49 埠頭からバラクータ号で、トリニダッドへ向けて出航し、西インド諸島を一巡して、9 月下旬にニューヨークに帰着した旅の取材ノート。このノートにより、「熱帯への真夏の旅」(“A Midsummer Trip to the Tropics”)の草稿を完成し、その 700 ドルの草稿料で、マルティニークでの二年間の旅に出発することになる。ノートの表紙には Student's Book の表題があり、横紙で 29 行に区切られ、1 頁に 18~20 行程度の走り書きされている。冒頭に S.S.バラクータと署名され、6 行目から書き出されて、1 冊目でサン・ピエール到着までを素描し、2 冊目にすぐ引き継がれている。そして帰国直前に立ち寄ったセント・ルシア島のピトン山のゴシック的な山様の描写で終わっている。完成した作品はこの倍ほどの内容で、ルフツ博士のクリオールの海についての描写や蛇についての蘊蓄、バルバドス島のことなどこのノートに見えない。別にもう一冊あったことが推測される。

3. 西インド諸島取材ノート。

22 頁。14.4×9.5 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

黒表紙のメモ帳で、内容は船の規則や海事上の義務についての詳細な取材メモで、ニューヨークから西インド諸島を歴訪した前記の旅行の時、船内で使ったものである。このことはバルバドス島訪問時の住所が記されていることからわかる。

4. 仏領西インド諸島の取材ノート。

162 頁。13.7×9 cm。早稲田大学図書館所蔵。

第 1 頁に 13 篇の作品題名がメモしてあるが、その多くが、「マルティニーク・

スケッチ集」(“Martinique Sketches”)に含まれることになる。

5. マルティニークの取材ノート。

193 頁。14×8.5 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

黒の皮張りのしっかりした手帳に、細字でクリオール之歌などマルティニークの印象記を書いている。前記早稲田大学図書館所蔵のノートと対をなしていると思われる。

6. マルティニークの取材ノート。

24 頁。22.2×17 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

一冊のノートのはずれた部分で、クリオール語のメモと教父ラバに関する調査メモである。

7. クリオールの歌取材ノート。

66 頁。21.1×15.2 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

表紙に No.1 Chansons Créoles の表題がある通り、すべてクリオール之歌の蒐集集で、最後に 1 から 119 番まで、各歌に通し番号がうたれ、整理されている。55 枚目の裏、56 枚目の裏表頁にそれぞれ “Après L’orage cé beaultemps”, “Cé la’ ca yé”, “A Notre Avantage” の印刷された歌が添付されている。

8. マルティニークの取材ノート。

50 頁。13.5×8 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

黒表紙のバリ Poudre Rigollot 発行の 1888 年の日記帳を使っている。一日一頁の定型日記帳で、7 月 1 日から 8 月 4 日までの日付の頁には歌の取材をし、鉛筆のデッサンもみられる。以下は余白のままで、9 月 26 日の頁から最後まで 17 頁に、最後の頁から反対に書き始められて、ペレ山登頂の印象がメモされている。

9. マルティニークの取材ノート。

58 頁。14.5×9.5 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

明るいブルーの紙表紙のノートで、全体で 29 枚あり、途中 2 頁分が白紙であるが、表裏表紙の内側にも記入がある。

1 頁目に “% Me Nanton Dillie Blanc, % Chas. Buck & Co 500 Madison Av.”,

2 頁目に “F. Page Wood 334 W 19 th ST.” など住所のメモが残されている。

10. マルティニークの取材ノート。

55 頁。14.5×9.5 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

赤い紙表紙の粗末なメモ帳で、教父ラバについての調査メモとクリオール之歌の採集がされている。

11. マルティニーク取材ノート。

38 頁。14.5×9.5 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

前記のものと同型のメモ帳で、内容はグランド・アンスを訪問した時の取材と多くの歌の採集で、それぞれ前後から書き進めている。

12. マルティニークの取材ノート。

58 頁のうち 3 枚が破損。12.7×8.3 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

白い厚紙表紙で四角に布当てがあり、布とじのメモ帳で、マルティニークの取材。

13. マルティニークの取材ノート。

44 頁。12.7×8.3 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

前記のものと同型のメモ帳で、クリオール之歌の取材が中心である。

14. 『チタ』ノート。

62 頁。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

『カレワラ』やギリシア神話、そして聖書、英仏の詩歌のなかから、海に関する物語や詩句を抜粋するなど、実に丁寧な資料の蒐集ぶりがうかがわれる。1856 年 8 月 10 日のハリケーンによるデルニエール島の水没に関するメモが 7 頁目に記入されている。そして「無限の青い精霊、青い霊、聖なる青い精霊」(“The Infinite Blue Ghost/The Blue Spirit/The Holy Blue Ghost”)の言葉が大書されているのは「A 6」と通し番号が打たれた頁である。この言葉は『チタ』(Chita)の「デルニエール島の伝説」(“The Legend of L' Île Dernière”)の第 4 章の中心的象徴として神話的海を表象している。

15. 江の島・藤沢・鎌倉取材ノート。

72 頁。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

表紙に“Japan IV/The Temples”とあるので来日後 4 冊目の取材ノートと思われる。またはその内容が『日本瞥見記』(*Glimpses of Unfamiliar Japan*)の第 4 章「江の島行脚」(“A Pilgrimage to Enoshima”)に当たっているので、第 4 章を示す数字かもしれない。ハーンがよく使っている路上で走り書きをするのに便利

な掌小のメモ帳ではなく、中型ノートを使った原稿の下書きで、記述は整い、縦に一本抹消の線を入れて、完成原稿で使った箇所を示すのがハーンの癖であるが、このノートの9割程度が使用済みの線が入っている。その内容は二度目の江の島訪問を扱っているので、5月20日から26日の間の数日のことであろう。フェノロサ宛にこの旅の報告をしているのが5月27日の手紙で、内容も一致している。これは1892年3月13日、20日、27日と3回に分けて、ニューオリンズの『タイムズ・デモクラット』日曜版に掲載された。

16. 鎌倉への旅、横浜・東京取材ノート。

100頁、うち4頁空白、断片6頁。8×12 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

ハーンが付けた通し番号の2頁目に六地藏、3頁目に庚申についてのメモがあるので、「地藏」(“Jizo”)の第5節から後の取材ノートであることがわかる。同じ通し番号の35頁目に島根県尋常中学校との雇用契約内容が書かれているので、「仮条約書」が東京で交わされた1890年(明治23年)7月19日前後のことであろう。通し番号56頁目に本郷五丁目十番地三好屋のメモがある。60頁から65頁に第2章「弘法大師の書」(“The Writing of Kōbōdaishi”)のメモが残っている。

17. 松江到着後の取材ノート。

43頁のうち1頁空白。14×22.5 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

1頁目の上部右端にL. H. 05とあるので、日本に来てから使用した取材メモの第5冊目とも考えられる。いきなり旅館の座敷の様子がメモされ、女中の挨拶、種々の念仏の記録、花札、千代鶴という芸者の名前、辻占売りの売り声と出てくるので、8月30日に到着してから松江の最初の印象記の順序を彷彿とさせる。荒川亀齊が彫った龍昌寺の石地藏に行き会ったのが、9月28日のことであったが、9頁から10頁にかけてそれが記録されている。芸者の唄や踊りのメモは9月27日に開かれた籠手田知事の招宴の時のことらしいと推測できる。そして翌年1月2日に起きた心中事件のことがくわしく書き込まれていたり、2月26日の『ジャパン・ウィークリー・メイル』にわずか20行足らずで報じられた鉄道心中事件の切抜きがはりつけてあるのが30頁目である。この事件が後に「赤い婚札」(“The Red Bridal”)という作品に結実する。こうしてみると、松江前期の取材ノートで

あることがわかる。

18. 松江時代中頃の取材ノート。

35 頁。22.5×14 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

日本の女の髪形の種類や「日本の庭」(“In a Japanese Garden”)に取り入れられた螢のこと、日本の家庭の宗教行事に関心を向けてゆき、眼病を患っている富田旅館のおのぶと一畑薬師のことが出てくるので、ほぼ6月頃までのメモであろう。

19. 関西旅行・隠岐の船旅取材メモ。

113 頁、うち空白1頁。12.4×7.8 cm。小泉八雲記念館所蔵。本巻収録。

1892年7月の旅行メモ。

20. 隠岐旅行・熊本への帰途の旅取材メモ。

108 頁、うち空白6頁。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

本書収録の記念館所蔵のメモノートに続くもので、95 頁まででこの旅のメモは終っている。その後は『日本瞥見記』の作品構成と必要な注についてメモされている。

隠岐旅行のメモは地誌的な調査をし、チェンバレンとメイスンの『日本旅行案内』(*A Handbook for Travellers in Japan*)の改訂に役立てる目的があったので、詳細なものである。また熊本への帰途の旅は作品に書かれなかったので、その帰途の道筋を確定する上で貴重な資料である。

21. 熊本時代の前半期の取材メモ。

106 頁、うち4頁分が空白。8×12 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

多くの頁の記入が鉛筆でなされていて、薄れて判読が難しいが、『心』(*Kokoro*)に収められた「日本文化の真髄」(“The Genius of Japanese Civilization”)、「あみだ寺比丘尼」(“The Nun of the Temple of Amida”)もあれば、『東の国から』(*Out of the East*)に収められた「夏の日の夢」(“The Dream of a Summer Day”)の浦島伝説もあり、また遡って、『日本瞥見記』の中の「日本の庭」の第13章以下の動物や昆虫の鳴き声についての記述がA 1、A 2……という別の通し番号で最初の部分で現れたりする。そのことを考えると、1892年の前半から、間に隠岐旅行の取材メモをはさんで、1893年の秋頃まで使われたものと思われる。

22. 熊本時代の中頃の取材メモ。

96 頁。12.1×8 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

「永遠の女性像について」(“Of the Eternal Feminine”) に結びつく日本女性の特色や西洋の恋愛小説を学生たちに説明することが難しいという「九州学生と共に」(“With Kyūshū Students”) など『東の国から』に収められる作品のメモが中心である。41 頁目から「赤い婚礼」の作品メモが興味深い。弘文堂の『日本童話集』のリストが書かれていることから 1893 年から 1894 年のメモと推定される。

23. 熊本時代中頃の取材メモ。

18 頁。12.5×8 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

『日本瞥見記』のための索引作りに使われたメモ帳。A から T までが書かれていたが、真中の D から R までが脱落している。1894 年 2 月の作業である。

24. 熊本時代中頃の取材メモ。

117 頁。12.2×8 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

『日本瞥見記』のための索引 U から Z までが最初の 6 頁に書かれ、西インド諸島の思い出が書かれている。1894 年 3 月のチェンバレンに宛てた手紙と内容が符号するのでその頃のものである。動機はマルティニークで親しくした家族の男の子から来た便りである。『心』に収められた「はる」(“Haru”)の草稿、「熊本籠城の唄」の翻訳など多様な主題のものが含まれている。

25. 神戸時代初期の取材メモ。

99 頁。12.3×8 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

1894 年末から 1895 年初めにかけての取材で、日清戦争に従軍する駅前の兵士たちや新しい開港地での生活模様が描かれる。素材となっているのは、そのほとんどが『心』に収められた「ある保守主義者」(“A Conservative”)と「君子」(“Kimiko”)である。

26. 神戸時代の京都旅行その他の取材ノート。

61 頁。19×12 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫。

『心』に収められる諸作品の取材メモというよりも原稿の下書きである。『心』に収められた「門付け」(“A Street Singer”)、「趨勢一瞥」(“A Glimpse of Tendencies”)、「あみだ寺比丘尼」(“The Nun of the Temple of Amida”)、1895

年(明治28年)4月15日~21日の京都旅行である「旅日記から」(“From a Traveling Diary”)等である。1895年3月から5月頃までのものであろう。

27. 京都遷都千百年祭見物旅行メモ。

106頁。12.4×7.9 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

前半77頁までは1895年(明治28年)10月22日~26日の京都旅行の詳細な取材メモである。その後は主に超自然的恐怖や悪魔体験にまつわる記憶を記述している。

28. 神戸時代終り頃の取材メモ。

119頁。11.5×7.4 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

1頁目に「心」の日本語のさまざまな意味を書いている。大阪旅行の時のメモや、日本美術に描かれた顔の問題が記述してあるので、1896年(明治29年)2月~5月頃の内容で6月26日からの山陰旅行の前までのものである。特に興味深いのが、「小泉八雲」として小泉家に入籍した2月10日前後のことであろうか、何度も自分の名前を漢字で練習していることである。

29. 神戸時代最後の取材メモ。

110頁。11.9×7.9 cm。コロンビア大学図書館所蔵。

入籍時の家族の氏名の漢字綴りの練習が見られるが、主に1896年(明治29年)6月末から8月23日までの約2か月間の山陰への旅行メモが中心である。興味深いのは、家族で美保関近くの海辺の保養地で避暑をしていた頃、その幸福感を詩に歌おうと何度も稿を改めている部分である。八雲の詩作は珍しいものである。

30. 東京時代の最初の取材メモ。

143頁。12.5×9.4 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

1896年(明治29年)9月8日に東京に到着した直後からその年の終り頃までの内容と思われる。東京で再会した出雲の学生たち、龍岡楼の女中のことなどの身辺の様子他に、『仏の畑の落穂』に収められた「生き神」(“A Living God”)、「勝五郎の再生」(“The Rebirth of Katsugorō”)の他に、その年の夏の出雲再訪の旅をふりかえっている。これは「出雲への旅日記」(“A Note of a Trip to Izumo”)として『アトランティック・マンスリー』(1897年5月)に発表された。

31. 東京時代の初め頃の取材メモ。

111頁。13×9.4 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

このメモ帳は前半 90 頁と後半の A 1、A 2 ……と通し番号を打った内容とは記入時期が違っている。前半は「勝五郎の再生」のくわしい内容と『異国情緒と回顧』(*Exotics and Retrospectives*) の諸作品のメモになっているので、1896 年から 1897 年の前半のものであり、後半の内容は日本で使われる香料についてのメモで、1898 年 2 月頃に大谷正信に調査を指示したものである。

32. 焼津滞在と富士登山の取材メモ。

112 頁。12.5×9.3 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

前半は鳴く虫に関する俳句の英訳、そして 1897 年 (明治 30 年) 8 月 4 日から焼津に滞在し、その帰途、8 月 25 日から教え子の藤崎八三郎の案内で富士山に登った。その詳細なメモが 56 頁から最後の 104 頁まで続いている。

33. 英文学史講義その他のメモ。

93 頁。13×9.2 cm。小泉八雲記念館所蔵。

英文学史を中心に、特殊講義や作品の草稿を含んでいる。1897 年から 1900 年にわたる。本巻収録。

34. 英文学史講義ノート。

98 頁。13×9.3 cm。天理図書館所蔵。

18 世紀初頭から 19 世紀ロマン派詩人、ヴィクトリア朝詩人、そして古典の散文作家からヴィクトリア朝小説で一応終り、35 枚目の裏面から古代英語による文学の詳細なメモが始まり、67 頁からエドモンド・ゴスやホイットマンについてのメモが突然加わるかと思うとイギリスの祝典劇から演劇の発展史に戻り、これも 76 枚目で中断し、ノートの最後から逆方向に 18 世紀以降の散文の歴史メモが始まりゴシック小説のところで中断し、78 枚目の裏面の末尾に “Ikao-Uyeno/Uguisudani/5 o'clock” のメモで終わっている。1898 年 (明治 31 年) – 1899 年のものであろう。(染村絢子『『東大講義メモ帳』と『浮世絵展覧会』』『へるん』No.27 号、1990 年参照。)

35. 東京時代の中頃の取材メモ。

145 頁。12.8×9.8 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

『霊の日本』(*In Ghostly Japan*) の「犬の遠ぼえ」(“Ululation”) と『明暗』(*Shadowings*) 中の「幻想」(“Fantasies”) の諸篇の草稿が中心となっている。1898 年前半のものと思われる。

36. 東京時代の中頃の取材メモ。

185 頁。12.8×9.3 cm。コロンビア大学図書館所蔵。

この手帳の半分以上はカタカナとひらがな、そして簡単な漢字の練習で埋められているが、最初から 24 頁までの表頁は『明暗』中の「夜光虫」(“Noctilucae”)の草稿である。また 26 頁から 29 頁までの英文学史のメモはイギリス・ルネサンス以前の 15 世紀—16 世紀初頭のものである。そして 95 頁にはミッチェル・マクドナルド宛の手紙の下書きがあり、「6 つの物語を含むこの文集」(*A Japanese Miscellany*)を献げ、新しい世紀の始まりにあたり、10 年の友情を記念することが書かれているので、1899 年の夏から 1900 年にかけてのメモ帳であることがわかる。

37. 東京時代の中頃の取材メモ。

80 頁。12.5×8 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫。

英文学史の中世文学からルネサンス日記文学までの講義メモと A 8 から A 20 まで鏡と日本の民族学的伝承が記述されている。7 歳の時の足の怪我の思い出を語っていることが興味を引く。

38. 東京時代の後半の取材メモ。

84 頁。12.7×8.3 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

聖書からの天空、太陽と月に関する章句の引用、少年時代の回想録、従姉と幽霊の物語、これは死後出版された一連の自伝的小品の草稿である。1900 年頃のものであろう。

39. 東京時代の終り頃の取材ノート。

77 頁。12.5×18.5 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫。

焼津での大漁の風景から書き始められ、『日本雑記』(*A Japanese Miscellany*)に収められている「お大の事」(“The Case of O-Dai”)「日本の子供の歌」(“Songs of Japanese Children”)、そして『骨董』(*Kotto*)に収められている諸編「ある女の日記」(“A Woman’s Diary”)、「草ひばり」(“Kusa-Hibari”)、「茶碗の中」(“In a Cup of Tea”)等のメモがある。そしてハーン最後の作品集『怪談』(*Kwaidan*)の「葬られた秘密」(“A Dead Secret”)のお園の話が書きとめられている。『リ・エコー』(*Re-Echo*)に収められたデッサンがこのメモにふくまれている。1901 年頃のものであろう。

40. 東京時代の終り頃の取材ノート。

107 頁。12.5×18.5 cm。ヴァージニア大学図書館バレット文庫所蔵。

『骨董』に収められた「生霊」(“Ikiryō”)の六兵衛の物語、「幽霊滝の伝説」(“The Legend of Yurei-Daki”)のお勝の話、「おかめのはなし」(“The Story of O-Kamé”)、「螢」(“Fireflies”)、「草ひばり」(“Kusa-Hibari”)、そして『怪談』の「ひまわり」(“Hi-Mawari”)、「お貞のはなし」(“The Story of O-Tei”)、「力ばか」(“Riki-baka”)、「食人鬼」(“Jiki-ninki”)、「蟻」(“Ants”)そして死後出版された「私の最初のロマンス」(“My First Romance”)の草稿を含んでいる。1902 年頃のものであろう。

以上のように創作ノート、講義ノートの概略を紹介した。今後これらの第一資料と完成した作品を比較し、ハーンの創作過程を跡づける研究が進展することを期待したい。

1992 年 9 月 松江

八雲会編集委員会委員長

銭 本 健 二

謝 辞

雄松堂小泉八雲草稿・未刊行書簡拾遺集シリーズは、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）来日百周年を記念して、松江にある八雲会の編集委員会によって編集された。この記念出版は、ハーンの未発表の作品の草稿や書簡を、その美しい手蹟のままに再現することを目的としている。本シリーズの最後の巻は小泉八雲記念館所蔵のメモ帳3冊を収めた。この出版を許可いただいた松江市のご理解に心から感謝申し上げます。また序文において紹介をしています他の図書館に所蔵されているメモ帳について、閲覧を許可いただいたり、マイクロフィルムをお送りいただいた各図書館、ヴァージニア大学アルダーマン図書館、ハンティントン大学図書館、早稲田大学図書館のご理解とご協力に感謝いたします。そして資料入手にご努力いただいた松蔭女子大学黒澤一晃学長の強力な励ましとコロンビア大学所蔵の2冊のメモ帳の内容を知らせてくださったエイミー・ハインリッヒさんのご教示に感謝します。このメモ帳は川端康成氏がドナルド・キーン教授を通して、同図書館に寄贈されたものです。それから、私が今夏、シャーロットビルを訪問した時、私に惜しみなく重要な情報を教えてくださったアルダーマン図書館の貴重図書・手稿部門の主任司書グレゴリー・ジョンソン博士に深く感謝申し上げます。

そしてコロラド・スプリングスから松江に来て、私のもとで半年間小泉八雲の研究を続けた日系小学校教師ナオミ・ウェストコットさんの情熱と大学院で小泉八雲の文学作品を学んでいる横山純子さんの助言と励ましに助けられたことを特にここに記します。

最後に、不十分な資料調査しかできず、原稿を書くことをながくためらっていた私を、本当に驚くべき忍耐で待ち続けてくださった雄松堂出版の和田重男氏と編集部の方がたにお詫びと感謝の言葉を言い尽くせません。

銭 本 健 二

ACKNOWLEDGEMENT

These volumes of the Yushodo Hearn series are published in celebration of the centenary of Lafcadio Hearn's arrival in Japan. They are compiled and edited by the committee of the Hearn Society in Matsue, and have two common aims. One is to bring some unpublished pieces of work and letters into public view. The other is to publish facsimiles of some Hearn's manuscripts as evidence of his careful and laborious revision of his own work.

This last volume of the series contains three notebooks which are held by the Lafcadio Hearn Memorial Museum in Matsue. I sincerely thank the Mayor of Matsue for permitting us to publish them in facsimile. And I am happy to say that Alderman Library of Virginia University, Huntington University Library and Waseda University Library sent me the microfilms of notebooks they holds or permitted me to read them, and I deeply thanks Dr. Kazuaki Kurosawa, President of Shoin Women's University for his cooperation to gain the materials and for his strong encouragements to my further research and Mrs. Amy Heinrich, librarian of Columbia University for giving me an information of the contents of two notebooks of Hearn which were presented by Yasunari Kawabata through Prof. Donald Keene and Dr. Gregory Johnson, head of rare books and manuscripts section of Alderman Library for giving me the most important informations generously when I visited Charlottesville. I feel especially grateful to Miss Naomi Westcott, teacher of a primary school of Colorado Springs, who came to Matsue to study Hearn's literary works under me for her passionate devotion to literature, and to Miss Junko Yokoyama, who has been studying Hearn in Japan in the graduate school of Shimane University, for her kind advices and tender encouragements for all these depressing days.

Lastly, I cannot find any word to express my deep apologies and thanks to Mr. Shigeo Wada, head of the editor section of Yushodo Press and its staff for his and their waiting for my work with really wonderous patience while I had been